

# キコス・キカス      キコシラス・キコシメス・シラシメス

田 中 みどり

一 記紀萬葉のキコス・キカス

一・一 キコスとキカス

一・二 聴コスと聞カス

一・三 キコスとオモホス

一・四 キコスとキコユ

二 記紀萬葉のキコシラス・キコシメス・シラシメス

二・一 ラス・キコシラス

二・二 メス・キコシメス

二・三 シラス・シラシメス

おわりに

キクにスが接したと考えられるものには、キカス・キコス両形がある。キカスは「聞く」の意であり、キコスは記紀では「思う、判断する」の意、萬葉集では「言う」の意となる。

同じくキクをもとしながら、「聞く」と「言う」と、反対といってもよい意味に分化するのは、キコスは「聴」、キカスは「聞」の意のキクをもととしたからである。

キコスはキコシラス・キコシメスのように、尊敬の意の副詞ともなる。

また、メスも尊敬の意味の補助動詞となつて、シラシメスを形作る。

底本として

新編日本古典文学全集『古事記』（小学館 一九九七年。底本Ⅱ真福寺本古事記に校訂を加えたもの）以下、「記」と略す。

新編日本古典文学全集『日本書紀』①②③（小学館 一九九四年、一九九六年、一九九八年。底本Ⅱ寛文九年版本日本書紀に校訂を加えたもの）以下、「紀」と略す。

新編日本古典文学全集『風土記』（小学館 一九九七年。底本Ⅱ三条西家本、天理図書館善本叢書第一巻『古代史籍集』の播磨国風土記／永青文庫蔵、細川家本『出雲国風土記諸本集』の出雲国風土記／時雨亭文庫本、冷泉家時雨亭叢書47『豊後国風土記・公卿補任』の豊後国風土記／猪熊本の肥前国風土記／茨城県立歴史館蔵、菅政友本「常陸国風土記四本集成」の常陸国風土記／その他：逸文に校訂を加えたもの）以下、「風土記」と略す。

岩波新日本古典文学大系『萬葉集 一・二・三・四』（一九九九年、二〇〇〇年、二〇〇二年、二〇〇三年。底本Ⅱ西本願寺本万葉集に校訂を加えたもの）以下、「萬葉」と略す。

を用いる。ただし、訳文については、適宜、勘案する。

## 一 記紀萬葉のキコス・キカス

キク（聞）にスが接したと考えられるものには、キカス・キコス両形がある。キカスは「聞く」の意であり、キコスは記紀では「思う、判断する」の意、萬葉集では「言う」の意となる。キカスのほうは変化が認められないが、キコスのほうには大きな違いがある。このキカス・キコスについて検討する。

### 一・一 キコスとキカス

キク（聞）にスが接したものに、キコス・キカス両形がある。記紀では、

キコス6例

○八千矛の 神の命は… 麗し女を 有りと聞こして（阿理登伎許志弓）… [記二歌謡]

○…大君し 良しと聞こさば（与斯登岐許佐婆）… [記六五歌謡]

○…磐之媛が おほろかに 聞さぬ（杵許磋怒）… [記五六歌謡]

○…あやに な恋ひ聞こし（那古斐岐許志）… [記三歌謡]

○…美味らに 聞しもち飲せ（宇麻良爾 岐許志母

知袁勢) まろが父

〔記四八歌謡〕

○…うまらに 聞し持ち食せ(字摩羅珥 枳虚之茂  
知塙勢) まろが父

〔紀三九歌謡〕

キカス3例

○八千矛の 神の命は… 賢し女を 有りと聞かし  
て(阿理登岐迦志弓)…

〔記二歌謡〕

○…雁産むと 汝は聞かすや(儼波企箇輸押)…

〔紀六二歌謡〕

○…大君は そこを聞かして(賊抛鳴柯阿斯題)…

〔紀七五歌謡〕

がある。

このうち古事記二歌謡では、

○八千矛の 神の命は 八島国 妻娶きかねて  
遠々し 高志の国に

賢し女を 有りと聞かして(阿理登岐迦志弓)

麗し女を 有りと聞こして(阿理登伎許志弓)…

〔記二歌謡〕

のように、キカス・キコスふたつの用例がならんでいる。

これについて、土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』  
(一九七二年 角川書店 二〇頁―二三頁)は、「聞こす」は「聞  
かす」の音韻変化であるとして、「賢し女を有りと聞かし  
て」と「麗し女を有りと聞こして」とをひとまとめにして

「賢い、美しい乙女がいるとお聞きになって」と訳してい  
る。

◇有りと聞こして 「聞こす」は「聞かす」の音韻

変化。「知らす―知ろす」「思はす―思ほす」「と  
どろかす―とどろこす」(記神代訓注)。

『古代歌謡全注釈 古事記編』二三頁  
新編日本古典文学全集『古事記』(八六頁)も、「聞かす」

「聞こす」ともに「お聞きになって」と訳している。とこ  
ろが、時代別国語大辞典上代編「きこす」の項では、「①  
言うの意」の例としてこの「きこして」を挙げている。

時代別国語大辞典上代編「きこす」の項

◇きこ・す【令聞】(動四) 尊敬語。キクに敬語を

表わす動詞語尾スが接したキカスのカが乙類のコ  
に転じたもの。①言うの意。「遠々し越の国に賢

し女をありと聞かして麗し女をありと伎許志て」

(記神代)「わが背子しかくし伎許散ば天地の神  
を乞ひ禱み長くとぞ思ふ」(万四四九九)「会ひた

る君をな寝そと母寸許勢ども」(万三二八九)「い

さとを寸許瀬吾が名告らすな」(万二七一〇)「空

言も会はむと令聞恋のなぐさに」(万三〇六三)…

萬葉集には、キカスが4例(一音一字表記例なし)、キ  
コスが7例(一音一字表記3例)あり、あきらかにキカス

は「聞く」の意、キコスは「言う」の意で用いられている。  
また「キコシヲス」が6例（一音一字表記3例）・「キコシ  
メス」が2例（一音一字表記1例）存在し、これらは「統  
治する」の意で用いられている。

萬葉集キカス4例（うち一音一字表記例なし）

○あしひきの 山の常陰に 鳴く鹿の 声聞かすや  
も（声聞為八方） 山田守らす児

〔萬葉十・2156 秋の雜歌〕

○…人言を 良しと聞かして（吉跡所聞而）…

〔萬葉三・460 大伴坂上郎女〕

○…うべしこそ 吾が大君は 君ながら 聞かした  
まひて（所聞賜而） さす竹の 大宮こと 定  
めけらしも

〔萬葉六・1050 久邇の新京を讚めし歌

二首〕

○けだしくも 人の中言 聞かせかも（聞可毛）

ここだく待てど 君が来まさぬ

〔萬葉四・680 大伴宿祢家持〕

いずれも「聞く」の意である。

萬葉集キコス7例（うち一音一字表記3例）

○わが背子し かくし聞こさば（可久志伎許散婆）  
天地の 神を乞ひ禱み 長くとそ思ふ

〔萬葉二十・4499 中臣清麻呂朝臣〕

○…な寝ねそと 母聞こせども（母寸巨勢友）…

〔萬葉十三・3289 相聞〕

○犬上の 鳥籠の山なる 不知哉川 いさとを聞こ  
せ（不知二五寸許瀬） わが名告らすな

〔萬葉十一・2710 寄物陳思〕

○おしてる 難波の菅の ねもころに 君が聞こし  
て（君之聞四手） 年深く 長くし言へば…

〔萬葉四・619 大伴坂上郎女〕

○…早からば いま二日だみ あらむとそ 君は聞  
こしし（君者聞之二と）…

〔萬葉十三・3318 問答〕

○伊勢の海ゆ 鳴き来る鶴の 音どろも 君が聞こ  
さば（君之所聞者） 吾恋ひめやも

〔萬葉十一・2805 寄物陳思〕

○浅茅原 小野に標結ひ 空言も 逢はむと聞こせ  
（将相跡令聞） 恋のなぐさに

〔萬葉十二・3063 寄物陳思〕

いずれも「言う」の意である。

萬葉集キコシヲス6例（うち一音一字表記3例）

○…きこし食す（企許斯遠周） 国のまほらぞ…  
〔萬葉五・800 山上憶良〕

○…皇祖の 神の命の きこし食す (伎己之乎須)  
国のまほらに…

〔萬葉十八・4089 大伴宿祢家持〕

○…敷きませる 難波の宮は きこし食す (伎己之乎須)  
四方の国より…

〔萬葉二十・4360 大伴宿祢家持〕

○やすみしし 吾が大君の きこし食す (所聞食)  
天の下に 国はしも さはにあれども…

〔萬葉一・36 柿本朝臣人麻呂〕

○やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子の  
きこし食す (聞食) 御食つ国…

〔萬葉十三・3234 雜歌〕

○…きこし食す (聞食) 四方の国には 人さには  
満ちてはあれど…

〔萬葉二十・4331 大伴宿祢家持〕

萬葉集キコシメス2例 (うち一音一字表記1例)

○桜花 今さかりなり 難波の海 おしてる宮に  
聞こしめすなへ (伎許之売須奈倍)

〔萬葉二十・4361 大伴宿祢家持〕

○…やすみしし 吾が大君の きこしめす (所聞見  
為) 背面の国の…

〔萬葉二・199 柿本朝臣人麻呂〕

萬葉集のキコシラス・キコシメスは全て「統治する」の意である。ラスは、萬葉集卷第十三・323

4の「やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子の きこし食す (聞食) 御食つ国 (御食都国)

神風の 伊勢の国は…」の「御食つ国」とも関係の深い語で、食を供給する地を治めるところから「統治している」の意となる語である。またメスは「見

ス」から「召ス」の意をもつようになる語であるが、キコシメスの場合、「見ス」の「天皇が御覧になる」

意から「統治する」の意になったものである。したがって、これらキコシラス・キコシメスの実質的意

味 (統治している) をになうのはラス・メスであつて、キコシは接頭辞としてラス・メスを修飾すること

ばで、尊敬の意をもつ。

記紀でも、キカスの3例

○八千矛の 神の命は… 賢し女を 有りと聞かして (阿理登岐迦志弓) …

○…雁産むと 汝は聞かすや (儼波企箇輸那) …

〔紀六二歌謡〕

○…大君は そこを聞かして (賊抛鳴枳舸斯題) …

〔紀七五歌謡〕

は、すべて「聞く」の意と考えてよい。上にも掲げた古事

## 記二歌謡

○八千矛の 神の命は：

賢し女を 有りと聞かして（阿理登岐迦志弓）

麗し女を 有りと聞こして（阿理登岐許志弓）：

〔記二歌謡〕

のキコスを「言う」の意と考える時代別国語大辞典上代編は、萬葉集と記紀とを統一しようということで、キコスを「言う」としたのであろうか。この記二歌謡のキコスの意味は、記紀のほかのキコスの用例をみることで、明らかになる。

## 記六五歌謡

○八田の 一本菅は 一人居りとも 大君し 良し

と聞こさば（与斯登岐許佐婆） 一人居りとも

〔記六五歌謡〕

の「大君し 良しと聞こさば」について、『古代歌謡全注 古事記編』では「大君さえよいとおっしゃるなら」と訳している。が、これは、前の記二歌謡のキコスを「聞く」の意と考えていることとどのようにつながるのであろう。

全集『古事記』六五歌謡頭注には、

◇「聞こす」は「聞かす」と同じで、「聞く」の尊

敬語。「言ふ」の尊敬語とする説があるが誤り。

「良しと聞こさば」で、良いと思ってお聞きになるならば、の意。〔全集『古事記』二九九頁〕

と言っている。これは、古事記に關してのみの注であつて、萬葉集のキコスについては言及していないのであろう。

また、

○つのさはふ 磐之媛が おほろかに 聞きぬ（飢  
朋呂伽珥 枳許瑳怒） うら桑の木 寄るましじ  
き 河の隈々 よろほひ行くかも うら桑の木

〔紀五六歌謡〕

について、新潮国語辞典（一九六五年）「きこす」の項には、

◇きこす【聞（こ）す】（動）（文サ四）（「聞く」

に敬語の接尾語「す」の付いた形）①「聞く」の敬語。おききになる。「くはし女をありとーし（伎許志）て〔記上〕」②「言う」の敬語。おっしゃる。「逢はむとーせ（令聞）恋のなぐさに〔万一二・三〇六三〕」③お許しになる。「つぎねふ磐之姫が、おほろかにーさ（枳許瑳）ぬかも〔仁徳紀〕」④（補助動詞として）たまう。「あやに、な恋ひーし（岐許志）〔記上〕」

とあり、③の「お許しになる」の例として紀五六歌謡を掲げている。が、①②③④のあいだの連関が不明である。

新編日本古典文学全集『日本書紀 ②』では、「磐之媛が大切なものとされている桑の木よ。」と訳し、頭注に、

◇「聞さぬ」は、お聞きにならない、の意。すなわち、大切なものとして考えていらつしやるということ。  
「全集『日本書紀 ②』五〇頁」

と言う。ここでは、キコスは「聞く」の意でとらえられている。が、重要なのは、あとの「大切なものとして考えていらつしやる」の「考える」の意味である。

この「おほろかに 聞さぬ」は『古代歌謡全註釈 日本書紀編』（一九七六年 角川書店）で土橋が触れてもいる「おほろかに思ふ」（萬葉集）と同じ意味である、と考える。

◇おほろかに 聞こさぬ オホロカニはオホニと同じ。なおざりに、よいかげんに、の意。多くの場合否定辞を伴って、程度の高い意を表わすのに用いる。『万葉集』では「思ふ」と結んで、思いがなみたいていでない意に用いられるが、ここも同じ。「聞こす」は「言ふ」の敬語で、なみなみでなく、たいせつなものとおつしやる、の意である。  
『『古代歌謡全註釈 日本書紀編』一九一頁』  
萬葉集の「おほろかに思ふ」は、たとえば、次のような歌である。

○ますらをの 行くといふ道そ おほろかに 思ひ

て行くな（凡可尔 念而行勿） ますらをの伴

「萬葉六・974 聖武天皇」

「磐之媛が おほろかに 聞さぬ」のキコスは、この「おほろかに 思ひて」の「思フ」と同じ意味である。土橋説では、（この歌の場合）キコスを「言フ」の意と考えているため、

◆『万葉集』では「思ふ」と結んで、思いがなみたいていでない意に用いられるが、ここも同じ。

とはい言いながらも、このキコスを「思フ」と結びつけて考えていない。これは、萬葉集のキコスの用法にとらわれているための見落としてである。

紀五六歌謡「磐之媛が おほろかに 聞さぬ」のキコスは、「思う、判断する」の意である。そして、前にあげた、記六五歌謡「大君し 良しと聞こさば」のキコスも、この「思う、判断する」の意と考えることができる。

次に、

○…青山に 日が隠らば ぬばたまの 夜は出でなむ  
朝日の 笑み榮え来て 栲綱の 白き腕 沫  
雪の 若やる胸を そ叩き 叩き愛がり 真玉手  
玉手差し枕き 股長に 寝は寝さむを あやにな恋ひ聞こし（那古斐岐許志） 八千矛の 神の

命：『記三歌謡』

について、大系『古代歌謡集』・『古代歌謡全注釈 古事記編』（いずれも土橋寛）ではキコスを「言う」の敬語とし、『古代歌謡集』では「あまりひどく恋しがり仰言いますな」、『古代歌謡全注釈 古事記編』では「むやみに恋いこがれなさいますな」と訳している。『古代歌謡全注釈 古事記編』の語釈には、

◇…キコスは「聞かす」の音韻変化で、「言う」の敬語。「いさとを聞かせ吾が名告らすな」（万・二七一〇）などと用いる。「聞く」の敬語体の「聞こす」（記2）とは別で、「空言も会はむと令聞（きこせ）恋のなぐさに」（万・三〇六三）の表記が示すように、聞クに他動詞語尾スの接したもので、相手に言つて聞かせる意から、「言う」の敬語となったのである。ここは「恋ひ聞こす」という形になつてゐるので、キコスは補助動詞のようにも見えるが、『記紀』『万葉』を通じてキコスを補助動詞に用いた例はないので、「恋ひ」と複合した動詞と見るほうがよい。つまり八千矛神の「歌」に対して、そのようにむやみに、恋しがつて仰せられますな、とたしなめ慰めてゐるわけである。『古代歌謡全注釈 古事記編』三八頁

と言う。『古代歌謡全注釈 古事記編』では、記二歌謡の語釈に、キコスはキカスの音韻変化として、訳はひとまとめにして「賢い、美しい乙女がいるとお聞きになつて」としていることを上に述べた（154頁）。そのキカスと、この三歌謡のキカスとの区別を、どのようにつけければよいのか。そして、語釈に「恋しがつて仰せられますな」としているものを、訳では「むやみに恋いこがれなさいますな」としているが、この訳は、尊敬の補助動詞とらえての訳である。

全集『古事記』では、注記はなく、「むやみに恋いこがれなさいますな」と訳している。

時代別国語大辞典上代編は補助動詞とするが「くして下さるの意」と解す。

◇きこす【令聞】（動四）尊敬語。キクに敬語を表わす動詞語尾スが接したキカスのカが乙類のコに転じたもの。…③補助動詞として、くして下さるの意をあらわす。「あやにな恋ひ岐許志八千矛の神の命」（記神代）

「わたくしのことを、そんなに、わけもわからないほどに、恋してくださいますな」という、タマフに似た語とらえているのであろう。

新潮国語辞典（上掲 157頁）では、明確に「（補助動詞と



して) たまう。」として、「あやに、な恋ひきこし」の例を掲げている。

これについても、萬葉集に例をさがすと、「恋思ふ」の用例が1例ある。

○玉葛 花のみ咲きて 成らざるは 誰が恋ならめ  
吾は恋ひ思ふを (吾孤悲念乎)

〔萬葉二・102 巨勢郎女〕

「な恋ひきこし」の「恋ヒキコス」は、この「恋ヒ思フ」と同じ意味で、キコスは記六五歌謡・紀五六歌謡と同じく「思う」の意の動詞である。補助動詞のようにもうけとめられるが、記紀萬葉のうちに、ほかにそのような例はなく、キコスは補助動詞とはならなかったものと考え (これについては、土橋説も、訳は別にして基本的には、同じ視点である)。

次に、

○白檮の生に 横白を作り 横白に 醸みし大御酒  
美味らに 聞しもち飲せ (宇麻良爾 岐許志母知  
衰勢) まろが父 〔記四八歌謡〕

○櫃の生に 横白を作り 横白に 醸める大御酒  
うまらに 聞し持ち食せ (宇摩羅珥 枳虚之茂知  
塙勢) まろが父 〔紀三九歌謡〕

の「聞しもち飲せ」「聞し持ち食せ」について。

日本国語大辞典では「きこしもちおす」の項に、

◇きこしもちーお・す:をす【聞持食】『他サ四』

「(もち) は後世の「…もてゆく」などの「もて」と同じく継続を意味するものか) お召しあがりになる。お食べになる。きこしおす。きこしめす。

\*古事記中・歌謡「横白(よくす)に 醸(か)みし大御酒 甘(うま)らに 岐許志母知衰勢(キコシモチヲセ) まろが親(ち)」\*書紀上神一九年一〇月・歌謡「横白(よくす)に 醸(か)める大御酒 甘(うま)らに 枳虚之茂知塙勢(キコシモチヲセ) まろが親(ち)」

と言っているが、「きこし」や「おす(をす)」についての説明がないため、「もち」の「継続」の「意味」がどのような働きをしているのか不明である。

全集『日本書紀 ①』頭注には、

◇キコスもラスも飲食するの敬語。モチは二つの動詞を、その行為の同時性においてつなぐ場合に用いる。今日の「くしもつてくする」「食べもつて歩く」式の言い方」に当る。

「全集『日本書紀 ①』四八五頁」  
と言う。これは、『古代歌謡全注釈 日本書紀編』にも説

かれた考え方である。『古代歌謡全注釈 日本書紀編』は「甘らに 聞こしもち食せ」について、

◇聞こしもち飲せ キコス、ヲスともに飲食する意の敬語動詞。：

『古代歌謡全注釈 日本書紀編』一四四頁』  
と言い、

◎おいしく召し上がってください。

『古代歌謡全注釈 日本書紀編』一四三頁』  
と訳す。そして、

◇聞こしもち飲せ …… 関西方言の「食べモツテ歩く」とい言い方は、「聞こしもち飲せ」に近い用法である。

『古代歌謡全注釈 日本書紀編』一四五頁』  
と言う。関西方言の「食べもって歩く」は「食べながら歩く」の意で、主たる動作は「歩く」であるが同時に「食べる」という動作も行われることをあらわすものである。土橋説では、キコスもヲスも「ともに飲食する意の敬語動詞」であるというのであるから、同じ意の動詞をふたつ重ねていることになるので、土橋の解釈での「聞こしもち飲せ」は、関西方言の「食べもって歩く」に近くはない。

全集『古事記』では、

◇飲食するの意のキコスと、手に持って飲食する意のモチヲスとを並べた表現か。

『全集『古事記』二二六頁』  
と言うが、「モチヲス」という語が熟さない言い方である。

モツを含む表現を、記紀の中にさがすと、

○保食神、此云宇気母知能加微（うけもちのかみ）。

『神代紀 全集『日本書紀』①』六〇頁』

○「臣は是苞苴担が子なり」とまをす。苞苴担、此には珥倍毛菟（にへもつ）と云ふ。

『神武天皇即位前紀戊午年八月 全集『日本書紀』①』二二〇頁』

などがある。「うけもちのかみ」のモチ、「にへもつ」のモツなどは、「くを持つ」の意であるだろう。この場合は「モツ」がうける語は、「モツ」の目的語である。

また、古事記上巻のイザナギ神が黄泉より帰って、禊祓をし、神々が化生するくだりに、

○此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。

『全集『古事記』五二頁』  
とある。新編日本古典文学全集『古事記』では、

○此の三柱の綿津見神は、安曇連等が祖神と以ちい  
つく神ぞ。  
『全集『古事記』五二頁』

と訓み、「いつく」の注はあるが、「以ち」について注はな

い。訳は、

◎この三柱の綿津見神は、安曇連らが祖神として祭り仕える神である。

〔全集『古事記』五二頁・五三頁〕  
としている。大系『古事記 祝詞』（一九五八年 岩波書店）は（本文は全集と同じ）、

○此の三柱の綿津見神は、阿曇連等の祖神と以ち伊都久神なり。  
〔大系『古事記 祝詞』七一頁〕

と訓んで、頭注に、  
◇：「以ち」は接頭語、イツクは斎くで、心身の穢れを去って神につかえること。

〔大系『古事記 祝詞』七一頁〕  
と言う。日本古典全書『古事記 上』（一九六二年 朝日新聞社）では、本文が、

○此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神伊都久神也。

〔日本古典全書『古事記 上』一九九頁〕  
となっていて（「以」字がない）、

○此の三柱の綿津見の神は、阿曇の連らの祖神といつく神なり。

〔日本古典全書『古事記 上』一九八頁〕  
と訓んでいる。「祖神といつく」の注は、

◇祖先神として祭り仕へる。

〔日本古典全書『古事記 上』一九九頁〕

である。日本古典全書の本文であれば「阿曇の連らの祖神のいつく神なり。」と訓むほかないであろう。日本古典全書の本文では意味をなさないが、意をくんで訳した結果は新編日本古典文学全集と同じになっている。「以」に、「くとして」の意味があると考えられる。

今の「聞しもち飲せ」「聞し持ち食せ」の「モチ」もこれと同じような働きをするものである。キコスは「思う、判断する」の意であるから、「うまらにきこし」は「おいしい」と思い、「うまらにきこしもち」は「おいしいと思つて（味わいながら）」、「うまらにきこしもち食せ」は「おいしいと思つて（味わいながら）お召上がりください」の意となる。

以上、記紀のキコスは「思う、考える」の意味をもち、古事記六五歌謡の「大君し 良しと聞こさば」と日本書紀五六歌謡「磐之媛が おほろかに 聞こさぬ」のキコスは、「思う、判断する」の意、古事記三歌謡の「あやに な恋 ひきこし」の「恋ヒキコス」は、「恋ヒ思フ」と同じ意味で、キコスは「思う」の意の動詞、古事記四八歌謡・日本書紀三九歌謡の「うまらにきこしもちをせ」は「おいしいと思つて（味わいながら）お召上がりください」の意である。

以上述べたところより、記紀のキカスは「聞く」の意、キコス＝「思う、判断する」の意で、冒頭にあげた、

○八千矛の 神の命は：

賢し女を 有りと聞かして（阿理登岐迦志弓）  
麗し女を 有りと聞こして（阿理登伎許志弓）：

〔記二歌謡〕

の場合も、「聞かして」は「聞く」の意であり、「聞こして」は「思う、判断する」の意であると考える。

古事記二歌謡のキカス・キコスのように、（形あるいは意味の）よく似たふたつの表現を重ねる技法は古事記に特徴的な技法である。古事記二歌謡の後の部分にも、

○…さ婚ひに 在立たし（阿理多々斯）

婚ひに 在通はせ（阿理迦用婆勢）：

〔記二歌謡〕

があり、ほかにも、

○…真玉なす あが思ふ妹（阿賀母布伊毛）

鏡なす あが思ふ妻（阿賀母布都麻）：

〔記八九歌謡〕

○…其が葉の（曾賀波能） 広り坐し  
其の花の（曾能波那能） 照り坐す：

〔記一〇〇歌謡〕

などがある。

日本書紀にもこの技法がないわけではないが、たとえば古事記七八歌謡の、

○…下訪ひに わが訪ふ妹を（和賀登布伊毛袁）  
下泣きに わが泣く妻を（和賀那久都麻袁）：

〔記七八歌謡〕

は、「妹」と「妻」とで変化をつけているものの、「妹」は「わが訪ふ」の目的語で「わが訪ふ」が「妹」を修飾する形になっているものの、「妻」のほうは「わが泣く」の原因をあらわしつ「わが泣く」が「妻」を修飾していて、交錯しているためもあってか、日本書紀六九歌謡では、

○…下泣きに わが泣く妻（和餓儺勾菟摩）

片泣きに わが泣く妻（和餓儺勾菟摩）：

〔記六九歌謡〕

のように直されている。

ところで、古事記二歌謡によく似た歌が日本書紀にある。勾の大兄の皇子（後の安閑天皇）が春日の皇女を聘したときに口づから唱った歌である。

○八洲国 妻枕きかねて 春日の 春日の国に  
麗し女を 有りと聞きて（阿唎等枳枳底）  
宜し女を 有りと聞きて（阿唎等枳枳底）：

〔記九六歌謡〕

この歌では、「麗し女を 有りと聞きて 宜し女を 有り  
と聞きて」のように、二個とも「聞きて」であり、また、  
スは「聞く」に接して「聞く」がそのまま使われている。  
この歌から、古事記二歌謡のキコス・キカスが同じ意  
味のことばである、ということを確認することはできない。  
なぜならば、上に挙げた古事記七八歌謡「わが訪ふ妹」  
「わが泣く妻」と日本書紀六九歌謡「わが泣く妻」「わが  
泣く妻」のような整合操作がほどこされている可能性が十  
分にあるからである。

だがしかし、キカス・キコスが「聞く」がもとになつて  
できた語であるならば、何ゆえ、「聞く」という動詞にス  
の接したものがキカス・キコス両形あるのであろうか。考  
え得ることは、成立の時期が異なるということ、あるいは  
スの意味が異なるということ、あるいはキカスとキコスと  
は別語源であるということ、である。

## 一・二 聴コスと聞カス

キコスは記紀では「思う、判断する」の意であるが、萬  
葉集では「言う」の意となる。「思う、判断する」ことを  
ことばにするところから「言う」の意へと移っていったの  
であろう。また、萬葉集の時代には、キコシヲス・キコシ  
メスのような尊敬の接頭辞の用法をもつに至る。

『古代歌謡全注釈 古事記編』に、

◇有りと聞こして 「聞こす」は「聞かす」の音韻  
変化。「知らす―知ろす」「思はす―思ほす」「と  
どろかす―とどろこす」（記神代訓注）。

『古代歌謡全注釈 古事記編』二三頁  
といい、時代別国語大辞典上代編「きこす」の項にも、

◇きこす【令聞】（動四）尊敬語。キクに敬語を表  
わす動詞語尾が接したキカスのカが乙類のコに転  
じたもの。①言うの意。②飲食などをする意。③  
補助動詞として、～して下さるの意をあらわす。

という。時代別国語大辞典上代編にキカスの項はない。  
キコスが「聞く」にスが接したものであるならば、なに  
ゆえ、「聞く」の意の反対語といつてもよい「言う」の意  
に転じるのか。また、キカスとの違いはどこで生じたのか。

記紀の中でキコスと同じように才段音にスのつく形のも  
のは、ほかにオロス（織）のみである。これは、仁徳天皇  
が庶妹女鳥王を乞い給うた時の歌に出てくる。

○女鳥の わが王の 織ろす服（淤呂須波多） 誰  
が料ろかも [記六六歌謡]

○高行くや 速総別の 御襲衣料 [記六七歌謡]  
ここの記述は、日本書紀では、雌鳥皇女の織繰女人等（き

ぬおりめども」の歌として、以下のようになる。

○ ひさかたの 天金機 雌鳥が 織る金機（於瑠箇  
儼麼多） 隼別の 御襲料 「紀五九歌謡」

全く同じ歌ではないが、古事記のオロスは日本書紀ではオルになっている。

上に、古事記二歌謡の、

○ 八千矛の 神の命は：

賢し女を 有りと聞かして（阿理登岐迦志弓）  
麗し女を 有りと聞こして（阿理登伎許志弓）：

「記二歌謡」

ではキカス・キコスふたつの語が使われているのに対し、日本書紀九六歌謡では

○ 八洲国 妻枕きかねて 春日の 春日の国に  
麗し女を 有りと聞きて（阿唎等枳枳底）  
宜し女を 有りと聞きて（阿唎等枳枳底）：

「紀九六歌謡」

のように、二個ともキクが使われていることを述べた（163頁―164頁）。この場合には、「聞こして」を「聞きて」に改変したのではなく、記二歌謡の「聞かして」をもとにして紀九六歌謡で「聞きて」に改変したものである。

萬葉集ではキコスは「言う」の意でもちいられている。

日本書紀編纂の時期にはキコスは既に「言う」の意の語と

なっていたから、それは取り下げ、古い伝承をそのまま伝えた古事記に並べ用いられているキカスのほうを生かして、「聞きて」としたものであろう。

オロスには、歌の意味から考えて、「織る」の意があるから、これはオルがもたなくなってできた語であることは間違いない。そして、キコスも同じようにキクがもたなくなってできた語であろう。

同じくキクがもたなくなってきたと考えられるキカスは「聞く」の意であるが、キコスは記紀では「思う、考える」の意で萬葉集では「言う」の意になる。これは、キカスが漢語「聞」の意にあたるのに対して、キコスのほうは漢語「聴」の意にあたるものであるからである。以下に、新字源の説明をひく。

◇【聞】へなりたちゝ形声。耳と、音符門ボーンブン

（わける意↓分ブン）とから成り、ききわける意を表わす。

〈意味〉○①きく②音声を耳に感じる。①うけたまわる。②きいて知る。③においをかく。②きかせる。告げ知らせる。③きこえる（きこゆ）。⑦天聴に達する。①もうしあげる。②おとずれる。文通する。④うわさ。⑤きいて得た

知識。きくこと。㊶きこえる(きこゆ)。㊷音がゆきとどく。㊸知れわたる。㊹耳にはいる。

㊺きこえ。ほまれ。名譽。

【聴】へなりたちゝ形声。旧字は、耳と恵とく(正しい心)と、音符壬テイ(といただす意↓貞テイ)とから成り、聞いて正しくさばく、ひいて「ゆるす」、したがう意を表わす。

「意味」㊶きく。㊷さばく。さだめる。㊸明らかにする。念を入れてくわしく聞く。㊹待つ。㊺うかがう(伺)。㊻おさめる(治)。㊼うけられる。㊽したがう。㊾まかせる。㊿①声を聞く。②ゆるす。ききいれる。③まわしもの。しのび。外国の情勢を知る者。④役所。

『新字源』(角川書店 一九六八年)

「聴」の「聞いて正しくさばく」ことが、このキコス(思う、判断する)の意味である。上に、「譬之媛が おほろかに聞さぬ」(紀五六歌謡)のキコスを「お許しになる」の義と考える新潮国語辞典の説を挙げた(157頁)。「聴」の㊶②に「ゆるす。ききいれる。」があるから、これは正しい説であったということになる。この歌や古事記六五歌謡の「大君し 良しと聞こさば」の場合にはこの解釈であつてよい。が、他の用例を総合して考えたとき、「思う、判

断する」の意と考えたほうが、より広くなり、また、萬葉集の「言う」の意にもつながる。

よつて、キコスに「聞こす」の字をあてるより、「聴こす」としたほうがよいわけで、諸説「聞こす」としてゐるところが、キカスとの意味の違いをわからないものにしてゐたのである(新潮国語辞典も、キコスは『聞く』に敬意の接尾語「す」の付いた形」と、「聞」の字で説明してゐる)。

なお、現代語の「隣の人と口をきくようになった」「なまいきな口をきくな」の「きく」には、この萬葉の頃の「言う」の意でのキクの意がのこつてゐるものであろう。

### 一・三 キコスとオモホス

このような、オ段音にスのつく形のもの、萬葉集では、キコス(言う)のほかに、オモホス(思)がある。記紀のキコスが「思う、判断する」の意から「言う」の意に転じたのち、「思う、判断する」の意をもつようになったのが、このオモホスであろう。

オモホスは萬葉集に16例(うち一音一字表記7例)、オモホセリ2例(うち一音一字表記1例)、オモホシメス8



例（うち一音一字表記3例）ある。<sup>①</sup>そのうち、「ものな思ほし 物莫御念」（二・77）・「思ほすよりは 御念従者」（二・92）・「思ほすや君 御念八君」（三・330）・「思ほせ吾を 思御吾」（十・1890）・「思ほしめせか 御念食可」（二・29）・「思ほしめせか 御念食可」（二・167）・「思ほしめせか 御念食可」（十三・3326）などに「御」の字が使用されており、思ホスが敬語であることをうかがわせる（思ホスは、スの接する動詞で「御」の字をもつもの全12例中4例を占めている。また、「御」の字を使用した思ホシメスは3例あつて、このふたつで、「御」の字をもつもの12例の58%にあたる）。

オモホスは、後にオボスと変化して、「思う」の意の尊敬の語となる。このことは、オモホスに尊敬の意があり、その機能をスがになうということにほかならない。よつて、同じく才段音にスのついた記紀のキコス、オロスもまた、「聴ク」「織ル」に尊敬の意を付与したもの、すなわち、この場合のスに尊敬の意があるということである。

#### 一・四 キコスとキコユ

キコスは聴クにスが接してできた語であるが、才段音に接するという特殊な接しかたになっている。この語を考え

るとき、思いあたるのが、聞クに自発の助動詞ユが接するときに、同じように才段音に接してキコユという形になることである。自発の形は、記紀に聞コユと見ユがあり、萬葉集に思ホユ・偲ハユ（シヌハユ・シノハユ）・泣カユがある。今、これらの対応を表にしてみると、

自発	未然形接続	特殊接続
聞コユ（記紀萬）	聞カス（記紀萬）	聴コス（記紀）
見ユ（記紀萬）	見ス（紀）	キコス（萬）
思ホユ（萬）	（なし）	メス（萬）
偲ハユ（萬）	偲ハス（萬）	思ホス（萬）
泣カユ（萬）	泣カス（記）	（なし）
（なし）	（なし）	（なし）

「聞」という漢語には、「聞く」の意味と「聞こえる（八聞こゆ）」の意味とがある。「聞こえる（八聞こゆ）」は、「自発」から、「天聴に達する」の意味を生じ、さらに「もうしあげる」の意味を生む。このことは、日本語の「聞こゆ」にも、そのままあてはまる。萬葉集ではいまだ自発の用法にとどまるが、平安朝になると「申しあげる」の用法および補助動詞の用法がある。

○明日よりは 継ぎて聞こえむ（都芸弓伎許要牟）  
ほととぎす 一夜のからに 恋ひ渡るかも



〔萬葉十八・4069 四月一日、掾久米朝臣広縄の館に宴せし歌四首 能登臣乙美〕

○思ふ事すこし聞こゆべきぞ。

〔源氏物語帶木 新大系『源氏物語』①〕六七頁

○かの國の父母の事も覺えず、こゝには、かく久しく遊びこえて、ならひたてまつれり。

〔竹取物語 大系『竹取物語 伊勢物語 大和物語』六〇頁〕

「申しあげる（言う）」ことと「聞く」こととはまったく反対方向の動作であるが、こうしてキコユは謙讓語になることとなった。この点で、キコスがキコシメス・キコシラスに見られるように尊敬の意のことばとなるのと対するものである（キコシラス・キコシメスについては「二」において述べる）。

また、土橋寛には、スの語源としてアス（ags）を想定する説がある<sup>③</sup>。アス説は、聞コユ・思ホユの場合にも、ユの語源にアユ（ayu）を想定することになるはずである。しかしながら、そのような想定がなされたこともなく、アス・アユの語源も考え難いので、アス説を否定することができる。

次に、キコスは、記紀では「思う、判断する」の意であ

り、萬葉集では「言う」の意味になる。萬葉集では「思う、判断する」の意をあらわすにはオモホスがあるのであるが、記紀にこの語はない。キコスが「言う」の意に移ったゆえに、新しくオモホスができたのであろう。この接統のしかたはキコスに準じてオ段音接統となった。

## 二 記紀萬葉の

### キコシラス・キコシメス・シラシメス

キコスは、萬葉集では「言う」の意で使用されている。また、キコシメス・キコシラスという複合語もあらわれ、さらにシラスに補助動詞メスが接したシラシメスもあらわれる。

### 二・一 ラス・キコシラス

ラスは、記紀歌謡では、「うまらにきこしもち食せ」「あさず飲せ」の用例があつて、「飲食すること」をあらわす。今ひとつ、「栲の栲を 七重をし」の例があり、「着る」の意と考えられている。

#### 記紀歌謡5例

○…美味らに 聞しもち飲せ まろが父（宇麻呂爾

岐許志母知袁勢 麻呂賀知）〔記四八歌謡〕

○…うまらに 聞し持ち食せ まろが父（宇摩羅珥

枳虚之茂知塙勢 摩呂餓智) [紀三九歌謡]

○…止さず飲せ ささ (阿佐受袁勢 佐々)

[記三九歌謡]

○…あさず飲せ ささ (阿佐孺塙斉 佐佐)

[紀三二歌謡]

○臣の子は 栲の袴を 七重をし (那那陸鳴純)  
庭に立たして 脚帯撫だすも [紀七四歌謡]

また、神代紀上巻第八段一書第六に、大己貴神が飲食しようとするくだりがある。

○初大己貴神之平国也、行到出雲国五十狹狹之小汀、  
而且当飲食。

この「飲食」を全集では「みをししたまは(む)」と訓むが、大系(一九六七年 岩波書店)では「みをしせ(む)」と訓んで、頭注に

◇ミは敬称の接頭語。ヲシは飲食する、治める意。

〔大系『日本書紀 上』一三一頁〕

という。そして、時代別国語大辞典上代編「きこしをす」の項では、

○やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子の  
きこし食す (聞食) 御食つ国 (御食都国) 神  
風の 伊勢の国は…

〔萬葉十三・3234 雑歌〕

を、「①食べるの意」の例として挙げているのである。これは、意味は、岩波日本新古典文学大系『萬葉集 三』巻第十三・3234の脚注に、

◇「聞こし食す」は支配すること。

とあるように、「統治すること」である。「飲食すること」が、「統治する」の義につながるのであらうか。

萬葉集3234の歌では「きこし食す 御食つ国」と、食料を調達する国を大君が「きこし食す」と言っているであり、「みけつ国」は「御食都国」と表記されている。また、「統治する」意のヲスには「御食」の用字が1例ある。

○やすみしし 吾が大君の 食す国は (御食国者)  
大和もここも 同じとそ思ふ

〔萬葉六・956 大伴旅人〕

これらを考え合わせると、ヲスには「御食つ国」に通う意味があつたのではないかと考えられる。

神代紀第五段一書第十一には、保食神が登場する。

○保食神、此云字氣母知能加微。

〔全集『日本書紀 ①』六〇頁〕

この神は葦原中国にあつて、月夜見尊に饗(あ)へたてまつるに、飯(いひ)・鰯廣(はたのひろもの)・鰯狹(はたのきもの)・毛鹿(けのあらもの)・毛柔(けのにこもの)を口から

出した。忿然（いか）つた月夜見尊は保食神を撃ち殺す。その身体に牛馬・粟・繭・稗・稻・麦・大豆・小豆が生り、それらを天熊人（あまのくまひと）は天照大神に奉進（たてまつ）る。天照大神は「是の物は、顕見（うつつしき）蒼生（あをひとくさ）の食（く）ひて活（い）くべきものなり」と喜んで、陸田種子（はたけつものたね）・水田種子（みなつものたね）を殖えさせる。また、養蚕の道が始まった、という（全集『日本書紀』①『六〇頁六一頁』）。次に、神代紀第五段一書第六には「倉稻魂命」が登場し（全集『日本書紀』①『四二頁』、一書第七に

○倉稻魂、此云宇介能美挖磨。

〔全集『日本書紀』①』五二頁〕

と注する。さらに神武天皇即位前紀戊午年九月に、

○糧名為嚴稻魂女、稻魂女、此云于伽能迷。

〔全集『日本書紀』①』二二四頁〕

糧をしものを名けて嚴稻魂女と為ひ、稻魂女、此は于伽能迷と云ふ。

〔全集『日本書紀』①』二二五頁〕

とある。ウケモチノカミの「ウケ」とウカノミタマ・ウカノメの「ウカ」は交替形で、「食べもの」の意と考えられている。<sup>(3)</sup>

ところで、古事記上巻の五穀の起源の話に、「大氣都比

売神」が鼻口尻より種々（くさぐさ）の味物（うましもの）を取り出して種々に作り具えて進（たてまつ）つたため、速須佐之男命は大氣都比売神を殺す。その身に蚕・稻種・粟・小豆・麦・大豆が生ったので、神産巢日御祖命がこの種を取らせた、という（全集『古事記』六六頁・六九頁）。オホゲツヒメの「ゲ（ケ）」は「食料」の意であろう。そして、この「ケ」はミケツクニの「ケ」でもあるであろう。

古事記のオホゲツヒメの話と日本書紀のウケモチノカミの話とは同じ起源の話であるが、ケとウケとは、どのように違うのであろうか。ミケツクニより朝廷に奉られる贄は、食料に供する米や海産物などである。つまり、ケは「材料」である。しかして中央の人々にとって食料は「食べもの」である。ウケには、ケの前にウがついているが、これはウエ（飢饉）のウでもあるだろう。このウはワ行音のウであって、このウにスの接したものが、くだんのヲスである、と考える。すなわち、ケは食べる「材料」となるものをさし、ウケは、「ウ」のついている分、「食べもの」の感が強くなる。そうしてヲスは、「食べもの」に近づく。こうしてヲスに「御食」の字、ミケツクニに「御食都国」の字があてられることとなった。

朝廷にとつて、穀物や海産物を調達する土地を掌握することは、最も重要な要件である。そこで「飲食する」の義の

ラスが「統治する」の義に移っていったのである。日本国語大辞典（第一版）「おす」の項の語源説(3)に、

○ラスクニは、召上がりなさる物を作る国の意で、ここからラスを治める意とする（大嘗祭の本義Ⅱ折口信夫）

とある。これが正しい。

なお、古事記上巻に「夜の食国」がある。

○次詔月読命、汝命者、所知夜之食国矣、事依也。

訓食云袁須。

〔全集『古事記』五四頁〕

伊邪那伎命は、天照大御神に高天の原を、月讀命に夜の食国を、建速須佐之男命に海原を治めるように、と言った。

日は昼に照り、月は夜照るものであるから、月讀命に

「夜」をふりあてたのであろう。天の光がふりそそぐとき、

地上は昼となり、天の光のとどかないとき、地上は夜となる。

月讀命の名は単に「月命」というのではなく、「月読命」であるところにその意義がある。月を読むことは日を

数えることであって、農作をおこなう上に必要な仕事である。

「月読」という名は、その名付けのときから既に食物

を耕作することに結びつけられている。「夜の食国」とは、

地上の世界のことなのである。天と地と海と、世界をこの

三つに分けた古事記の発想は明解である。

（神代紀第五段一書第六には「天照大神者可以治高原也。月読尊者可以治滄海原潮之八百重也。素戔鳴尊者可以治天下也。」となつてゐる。これも天と海と地ということになるが、この場合、月読尊と海との関連は、航海に月や星を用いることと関係する。）

萬葉集では、上に述べた「食べるの意の尊敬語」以外には、「食す国」の形で、「統治する」の義でのみあらわれる。

ラス10例

（乎須2、御食1、食7）

○…天皇の食す国なれば（乎須久尔奈礼婆）命

持ち 立ち別れなば…

〔萬葉十七・4006 大伴宿祢家持〕

また、キコシラスが6例ある。

キコシラス6例

（企許斯遠周1、伎己之乎須2、

所聞食1、聞食2）

ラスは、時代別国語大辞典上代編「をす」の項に

◇上二段居（ウ）の連用形に敬意を表わすスが接し

たものかといわれる。

と言う。萬葉集卷第一・1の歌、

○…そらみつ 大和の国は おしなべて 吾こそ居

れ（吾許曾居） しきなべて 吾こそいませ（吾

己曾座）…

〔萬葉一・1 雄略天皇〕

の「居れ」「いませ」が「統治する」の意であるから、上

二段動詞「居（ウ）」にも「統治する」の意があることは考えられる。が、ヲスの用字は、「乎須」2例、「御食」1例、「食」7例であり、また、キコシヲスについても「企許斯遠周」1例、「伎己之乎須」2例、「所聞食」1例、「聞食」2例となっていて、万葉仮名「食」の使用例が多い。そして、時代別国語大辞典にあげられた「居（ウ）」説をたすける「居」の文字は見あたらない。

萬葉集で「飲食する」の義で用いられているのは、ヲス・タグ・ハムなどである。

○戯奴がため 吾が手もすまに 春の野に 抜ける  
茅花そ をして肥えませ（御食 而肥座）

〔萬葉八・1460 紀女郎〕

○妻もあらば 摘みて食べまし（採而多宜麻之）  
沙弥の山 野の上のうはぎ 過ぎにけらずや

〔萬葉二・221 柿本朝臣人麻呂〕

○瓜食めば（宇利波米婆） 子ども思はゆ 栗食めば（久利波米婆） まして俣はゆ…

〔萬葉五・802 山上憶良〕

ところで、萬葉集卷第三・475の歌に、

○…吾が大君 皇子の命 万代に 食賜麻思 大日

本 久邇の都は…

〔萬葉三・475 十六年甲申の春二月、安積皇子の薨ぜし時に、内舍人大伴宿祢家持の作りし歌六首〕

があつて、「食賜麻思」は一般に「めしたまはまし」と訓まれている。意味は「統治なさるはずであつた」である。萬葉475の歌の「食賜麻思」について、塙書房『萬葉集索引』では、

◆めす【食】（四段動詞）

として、「統治する」の意とする。新日本古典文学大系『萬葉集』の訳文では、ほかを「見したまふ」と記しながら、475の歌では「めしたまはまし」と仮名書きしているのであるが、これは、ほかの「見す」と区別して、「統治する」の義をあらわすためのものであろう。「統治する」の意での「ヲシタマフ」も「メシタマフ」もほかに例がなく、「お召しになる」の意での「メシタマフ」の用例が、次のヘメス・キコシメスゝの項に述べるように、2例存在するため、これを「めしたまはまし」と訓んでいるのであろう。

メス（見ス）は「国見をする」こと、「御覧になる」ことを表わして、やがて「召す」の意のことばとなったものである。「国見」は、豊穰を祈る農耕儀礼であつて、これ

にキコシが接したキコシメスは「統治する」の意となる。しかし、メス単独で「統治する」の意の例はない。同じく「統治する」の意のキコシラスには、ラスの形もある。こ  
こは、孤例となるが、「をしたまはまし」と訓んで、「統治  
なさるはずであった」と訳すものとする。

ヲシタマフ1例 (ヲシタマハマシ 食賜麻思1)

## 二・二 メス・キコシメス

メス(見ス)は、萬葉集にメス6例(うち一音一字表記  
3例)、メサク1例(うち一音一字表記例なし)、メシタマ  
フ10例(うち一音一字表記2例、メシのみ一音一字表記1  
例)、メシアキラム4例(うち一音一字表記1例)ある。<sup>(8)</sup>

メス(召ス)はメス9例(うち一音一字表記例なし)、  
メシタマフ2例(うち一音一字表記例なし)ある。また、  
メシツドフ1例(うち一音一字表記例なし)、メサグ1例  
(うち一音一字表記1例)ある。<sup>(9)</sup>

※「飲食する」の意の2例は、後(175頁)にのべるように、ヲ  
ス・ハムであると考ええる。

さらに、キコシメスが2例(うち一音一字表記1例)ある。

古い例では、

○やすみしし 吾が大君 高照らす 日の皇子 あ

らたへの 藤原が上に 食す国を 見したまはむ  
と(売之賜牟登) みあらかは 高知らさむと：

〔萬葉一・50 藤原宮の役民の作りし歌〕

○やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子 あ  
らたへの 藤井が原に 大御門 始めたまひて  
埴安の 堤の上に あり立たし 見したまへば  
(見之賜者)：

〔萬葉一・52 藤原宮の御井の歌〕

のような国見をいう歌がある。少し時代が下がると、

○：旅行く君は：国状を 見したまひて(見之賜  
而)：

〔萬葉六・971 四年壬申、藤原宇合卿、

西海道の節度使に遣はされし時に、高橋連虫

麻呂の作りし歌一首〕 (七三二年の秋)

のように、上位の人が国状を御覧になる場合にあらわれる。  
このことから、メス(見ス)の本義は「国見する」ことを  
言うと考ええる。「上位の人が国状を御覧になる」のは、そ  
こから意義を拡大して用いるようになったものであろう。

○やすみしし 我が大君の 夕されば 見したまふ  
らし(召賜良之) 明け来れば 問ひたまふらし  
(問賜良之) 神岳の 山の黄葉を 今日かも

問ひたまはまし（問給麻思） 明日もかも 見し  
たまはまし（召賜万旨） その山を：

〔萬葉二・159 天武天皇太后〕

に、「見したまふ」「問ひたまふ」が並置されているところから考えても、「見ス」は「問フ」に等価で、もともと「見ス」の「ス」自体に尊敬の意味はなく「タマフ」に尊敬の意味があつたと考える。（動詞＋スにタマフが承接するのは、「見シタマフ」「召シタマフ」のほかは、巻五・813「置カシタマフ」、巻六・1050「聞カシタマフ」の2例のみである。また、イマスの接した巻十九・4245「立タシイマス」があり、巻十三・3324にアソパスが補助動詞となつた「国見遊バス」がある。）

この場合はタマフを含めて「御覧になる」の意となるが、もともと、「天皇が国見をする」の意のことばであつたから、タマフが接さなくとも見スは尊敬の意に近い語感をもつていた。そこで次に「景物を御覧になる」意の見スがあられ、見スは敬語動詞となる。

○：こちごちの 花の盛りに 見さずとも（雖不見）  
かにもかくにも 君がみ行きは 今にしあ  
るべし

〔萬葉九・1749 春三月、諸卿大夫等の  
難波に下りし時の歌二首〕

○やすみしし 吾が大君の…あり通ひ 見さくも著  
し（御覧母知師） 清き白浜  
〔天平四年 七三二年の歌〕

〔萬葉六・938 山部赤人〕  
三形沙弥（十九・1228）・甘南備伊香真人（二十・4510）・大伴家持（十九・4254、十八・4098、二十・4360、二十・4509、二十・4266、十八・4099）の歌は、いずれもこの範疇の「見る」である。この「御覧になる」の意の「見ス」にタマフが接するのは、歌の語調によるものである。中において、

○：やすみしし 吾が大君 秋の花 しが色々に  
見したまひ（見賜） 明らめたまひ（明米多麻  
比） 酒みづき 栄ゆる今日の あやに貴さ

〔萬葉十九・4254 大伴宿祢家持〕  
のようなメシタマヒ・アキラメタマヒの例やメシアキラムの例はすべて、家持の語である。

メスは「国見をする」の意から、「御覧になる」の意となり、さらに、

○東の 多芸の御門に侍へど 昨日も今日も 召す  
言もなし（召言毛無）

〔萬葉二・184 皇子尊の宮の舍人等の働  
傷して作りし歌二十三首〕



○…やすみしし 吾が大君の…食す国を 定めたまふと 鶏が鳴く 東の国の 御軍士を 召したまひて (喚賜而) …

〔萬葉二・199 柿本朝臣人麻呂〕

○はしきやし 榮えし君の いましせば 昨日も今日も 吾を召さましを (吾乎召麻之乎)

〔萬葉三・454 天平三年辛未の秋七月、

大納言大伴卿の薨ぜし時の歌六首〕

のように「呼び出す」の意の「召ス」となる。

メスと訓まれているものの中に、

○戯奴がため 吾が手もすまに 春の野に 抜ける

茅花ぞ 召して肥えませ (御食而肥座)

〔萬葉八・1460 紀女郎の、大伴宿祢家

持に贈りし歌二首〕

○石麻呂に 吾物申す 夏瘦せに 良しといふもの

そ 鰻捕り食せ (武奈伎取喫) 売世の反なり

〔萬葉十六・3853 瘦せたる人を嗤咲ひ

し歌二首〕

のように、「飲食する」の意と考えられているものもある。ただし、1460の歌の用字は「御食」である。これは、萬葉集の中では「ヲス」の用字として多用されているもの

である。第五句は「メシテコヘマセ」ではなく、「ヲシテコヘマセ」と訓むものと考ええる。また、3853の歌の「喫」は「ハム」と訓まれている字である。よって、これも「ムナギトリメセ」ではなく、「ムナギトリハメ」と訓むものと考ええる。「売世反也 売世の反なり」は、後人の書入れと考える。<sup>9)</sup>

次に、キコシメスは、萬葉集に2例ある (うち一音一字表記1例)。

○桜花 今さかりなり 難波の海 おしてる宮に  
聞こしめすなへ (伎許之売須奈倍)

〔萬葉二十・4361 大伴宿祢家持〕

○…やすみしし わが大君の きこしめす (所聞見  
為) 背面の国の…

〔萬葉二・199 柿本朝臣人麻呂〕

4361の歌は一音一字表記であり、199の歌は「所聞」がキコス、「見為」がメスと訓み得るから、この2例はキコシメスと訓むことができる。「国見をする」ことから、「統治する」の意となったもので、なりたちも、キコシラスと同じである。キコシメスは、キコシラスと同様、メスに副詞のキコシが接したものである。



## 二・三 シラス・シラシメス

ラス・メスに近いことばに、シラスがある。この語は、「知る」の意のものと「領有する」の意のものがある。<sup>⑩</sup> 記紀では

○…所治賜天下 伊邪本和氣 天皇之 御子市辺之  
押齒王之 奴末

…天の下を 治し賜へる（所治賜天下） 伊邪本和  
氣 天皇の 御子市辺の 押齒王之 奴末

〔顯宗天皇の名宣り 全集『古事記』三五六  
頁一三五七頁〕

○…於市辺宮治天下、天万国万押磐尊御裔僕是也。

…市辺宮に 天下治めたまひし（於市辺宮治天下）  
天万国万押磐尊の 御裔僕らま 是なり

〔顯宗天皇の名宣り 全集『日本書紀』②』  
二三四頁―二三五頁〕

「治」があり、全集『古事記』では「天の下を 治め賜へる」、全集『日本書紀』②』では、「天下治めたまひし」と訓んでいる。「領有する」の義である。

萬葉集では、「知る」の意のものが3例

○思はぬを 思ふと言はば 大野なる 三笠の社の  
神し知らさむ（神思知三）

〔萬葉四・561 大伴宿祢百代〕  
すべて「神し知らさむ」の形である。

「領有する」の意のものは9例。このうち、

○…万代に かくし知らさむ（如是二と知三） み  
吉野の 秋津の宮は…

〔萬葉六・907 笠朝臣金村〕  
は「宮を領有する」こと、

○泣沢の 神社に神酒握多 祈れども 我が大君は  
高日知らしぬ（高日所知奴）

〔萬葉二・202 柿本朝臣人麻呂〕  
は「天を領有する」ことであるが、高市皇子尊の殯宮の時の歌であって、「天を領有する」とは、すなわち亡くなつて天に上がったことをさす。のこりの7例はすべて「国を領有する」ことである。

○高光る 我が日の皇子の 万代に 国知らさまし  
（国所知麻之） 島の宮はも

〔萬葉二・171 皇子尊の宮の舍人等の働  
傷して作りし歌二十三首〕

その他、知ラシ来ル2例・天知ラス3例・高知ラス7例などがある。

○…千代重ね いや継ぎ継ぎに 知らし来る（所知  
来流） 天の日継と 神ながら わが大君の 天

の下 治めたまへば：

〔萬葉十九・4254 大伴宿祢家持〕

○ひさかたの 天知らしめる（天所知流） 君ゆゑに 日月も知らず 恋ひわたるかも

〔萬葉二・200 柿本朝臣人麻呂〕

○神代より 吉野の宮に あり通ひ 高知らせるは（高所知者） 山川を良み

〔萬葉六・1006 山部宿祢赤人〕

シラス・シラシメスの語構成はどのようなものであろうか。伊勢物語初段に「むかし、おとこ、うみかうぶりして、平城の京、春日の里にしるよしして、狩に往にけり。」（大系『竹取物語 伊勢物語 大和物語』一九五七年）とあるように、シルに意義の核がある。「知」は漢語で

①しる。⑦さとる（覚）①わきまえる。みわけける。

②みとめる。⑤つかさどる。治める。④見知る。したしむ。④感じとる。ききしる。

： 「漢字源「知」の項」

などの意をあらわす語であるから、⑦②④④の意味のシルと「知」という漢字とが結びついた上で、⑤の意味「つかさどる。治める。」にもシルが用いられるようになったものと考ええる。ただ、萬葉集では、「知ル」は⑦②④④

の意味でのみ使われていて、⑤の意味「つかさどる。治める。」はシラスが分担している形である。また、「高知ラス」のうち

○神代より 吉野の宮に あり通ひ 高知らせるは（高所知者） 山川を良み

〔萬葉六・1006 山部宿祢赤人〕

○やすみしし 吾が大君の 神ながら 高知らせる（高所知流） 印南野の 大海の原の あらたへの 藤井の浦に：

〔萬葉六・938 山部宿祢赤人〕

は「土地を治める」意であるが、

○やすみしし わが大君 高照らす 日の皇子 あらたへの 藤原が上に 食す国を 見たまはむと みあらかは 高知らさむと（高所知武等）：

〔萬葉一・50 藤原の役民の作りし歌〕

は「宮を造営する」の意、

○…宮柱 太敷き奉り 高知らす（高知為） 布当

の宮は：

〔萬葉六・1050 久邇の新京を讃めし歌

二首〕

は「宮を造って、領有する」の意、

○吾が大君 神の命の 高知らす（高所知） 布当

の宮は：

〔萬葉六・1053 久邇の新京を讃めし歌

二首〕

○やすみしし わご大君の 高知らす（高知為）

吉野の宮は：〔萬葉六・923 山部宿祢赤人〕

○神代より 吉野の宮に あり通ひ 高知らせるは  
（高所知者） 山川を良み

〔萬葉六・1006 山部宿祢赤人〕

は「宮を領有する」の意になつてゐる。

「宮を造営する」は漢語の「つかさどる」の意にあてはまるものであるが、このような用例があることは、もともとシラスが「造営する」の意で使われる語であつたことを示すものであらう。

ところで、萬葉集卷第六・1047の歌に「シラシマス」と訓めるものがある。

○やすみしし 吾が大君の 高敷かす 大和の国は  
皇祖の 神の御代より 敷きませる 国にしあれば  
ば 生れまさむ 御子の継ぎ継ぎ 天の下 知ら  
しまさむと（所知座跡） 八百万 千年をかねて  
定めけむ 奈良の都は：

〔萬葉六・1047 田辺福麻呂之歌集中出也〕

このようにシラスに敬語の補助動詞マスが付くのは、シラ

スのス自体には敬語性がないことを示す。よつて、シラスは敬語の「領有なさる」ではなく、「領有する」ことのみをあらわす語である。

同様にして、シラシメスの実質的意味はシラスの方にあり、シラスに尊敬の補助動詞メスが接したものがシラシメスである。シラシメスは、萬葉集に11例+1例（或いは云ふ、「めしける」）ある。<sup>(1)</sup>

萬葉集卷第一・167の歌

○：天照らす 日女の命 天をば 知らしめすと

（所知食登） 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合いの極み 知らしめす（所知行） 神の命と  
：吾が大君 皇子の尊の 天の下 知らしめし  
ば（所知食世者）：

〔萬葉二・167 日並皇子の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂の作りし歌一首〕

に、日女の命が「天をば 知らしめす」、神の命が「知らしめす」、皇子の尊が「天の下 知らしめしせば」という例があるが、全体では神・神の御子を主語とするもの2例、皇祖を主語とするもの6例、天皇・皇子を主語とするもの4例である。二・167の皇子の尊は日並皇子、一・29は天智天皇、二・162は天武天皇、六・1053は天皇の皇子をさす。いずれの天皇も「神の命」あるいは「日の

皇子」と呼ばれている。天智・天武の古代国家統一を機に、天皇は神格化された。天皇を神と崇めることは、歌の中では、柿本人麻呂の力が大きい。その絶大な権力を表わすに従来のシラスでは不十分で、さらに尊敬の意をこめて、シラシメスを考案したのである。メスは上位者が「呼び出す」意であつたから、上位者が「与える」意のタマフが尊敬の補助動詞となつたのと同じように、尊敬の補助動詞とすることができた。

また、皇祖を詠んだ歌は、人麻呂の2例（一・29）のほか（十八・4094、4098、二十・4360、4465）は、大伴家持のものである。大和の国の歴史、大伴の家を重んじる家持にとつて、皇祖神は重要な起点であつた。以上のようにして、キコシラス・キコシメス・シラシメスは形作られてきた。

### おわりに

キクにスが接したと考えられるものには、キカス・キコス両形がある。キカスは「聞く」の意であり、キコスは「紀では「思う、判断する」の意、萬葉集では「言う」の意となる。同じくキクをもとしながら、「聞く」と「言う」と、反対といつてもよい意味に分化するのは、キコスは「聴」、キカスは「聞」の意のキクをもとしたからであ

る。

キコスはキコシラス・キコシメスのように、尊敬の意の副詞ともなる。ヲスは「食べる」「着る」をあらわすことばであつたが、「食べる」意から「領有する」の意をもつようになった。さらに尊敬をあらわす副詞のキコシが接して、キコシラスができた。メスは「見る」から「召す」をあらわすことばであつたが、「国見をする」の意から「領有する」意となり、これに尊敬をあらわす副詞のキコスが接して、キコシメスができた。ヲスに「食べる」意があつたように、やがてメスにも「食べる」の用法が生じ、また、ヲスに

○臣の子は 栲の袴を 七重をし（那那陞鳴絶）

庭に立たして 脚帯撫だすも

〔紀七四歌謡〕

があつたように、やがてメスも衣服を着ることの敬語をあらわすことばとなる。キコシメスは、現代でも、「酒を飲む」ことの尊敬語または丁寧語として用いられている。メシアガルは、「飲食する」ことの尊敬語または丁寧語で、こちらはアガルに「飲食する」の意があり、メシが敬語である。

シラスは、漢語の「知」に「領有する」の義があるため、「知る」の義と分けて、シルにスを接して、シラスとしたものであろう。ここにメスを接して尊敬の語シラシメスと

したのは、副詞キコシを接してキコシシラスとすればシが重複することと、キコシヲスの5音、キコシメスの5音に合わせて、シラシメスを5音にすると調子が合うことも考えられる。そして何より、この時代に既に、メスが抽象化して、尊敬の意味をあらわすこととなりわつていたということであろう。シラシメスの場合、メスは補助動詞であること、のちの時代のオボシメスなどを考え合わせればよいであろう。

## 注

(1) オモホス16例(うち一音一字表記7例)

○相見ては 月も経なくに 恋ふと言はば をそろと吾を 思ほさむかも (於毛保寒蟲)

〔萬葉四・654 大伴宿祢駿河麻呂〕

○：金かも たしけくあらむと 思ほして (於母保之弓) 下悩ますに：

〔萬葉十八・4094 大伴宿祢家持〕

○草枕 旅の翁と 思ほして (於母保之天) 針そ賜へる 縫はむ物もが

〔萬葉十八・4128 大伴宿祢池主〕

○古を 思ほすらしも (於母保須良之母) わご大君吉野の宮を あり通ひ見す

〔萬葉十八・4099 大伴宿祢家持〕

○天離る 鄙にあるわれを うたがたも 紐解き放けて 思ほすらめや (於毛保須良米也)

○松が浦に さわるうらだち ま人言 思ほすなもろ (於毛抱須奈母呂) わがもほのすも

〔萬葉十四・3552 東歌〕

○山川を 中に隔りて 遠くとも 心を近く 思ほせ我妹 (於毛保世和伎母)

〔萬葉十五・3764 中臣宅守〕

○：射狭庭の 岡に立たして 歌思ひ 辞思ほしし (辞思為師) み湯の上の：

〔萬葉三・322 山部宿祢赤人〕

○：あをによし 奈良山を越え いかさまに 思ほしめせか 或いは云ふ、「思ほしけめか」(所念計米可) あまざる 鄙にはあれど いはばしる 近江の国の 葉浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の命の 大宮は：

〔萬葉一・29 柿本朝臣人麻呂〕

○：思ほしし (所念之) 君と時どき 出でまして 遊びたまひし： 〔萬葉二・196 柿本朝臣人麻呂〕

○やすみしし 吾が大君 高照らす 日の皇子 あらたへの 藤原が上に 食す国を 見たまはむと みあらかは 高知らさむと 神ながら 思ほすなへに (所念奈戸二)： 〔萬葉一・50 藤原役民の作りし歌〕

○世の中の 人の言葉と 思ほすな (所念莫) まことそ恋ひし 逢はぬ日を多み

〔萬葉十二・2888 正述心緒〕

○吾が大君 ものな思ほし (物莫御念) 皇神の 副へて賜へる 吾がなけなくに

○秋山の 木の下隠り 行く水の 吾こそ益さめ 思ほすよりは (御念従者) [萬葉一・77 御名部皇女]

○藤波の 花は盛りに なりにけり 奈良の都を 思ほすや君 (御念八君) [萬葉二・92 鏡王女]

○春山の 友うぐひすの 鳴き別れ 帰ります間も 思ほせ吾を (思御吾) [萬葉三・330 防人司祐大伴四綱] [萬葉十・1890 春の相聞]

オモホセリ2例 (うち一音一字表記1例)

○：深海松の 深めし吾を 俣海松の また行き帰り 妻と言はじとかも 思ほせる君 (思保世流君) [萬葉十三・3301 相聞]

○楽浪の 志賀さざれ波 しくしくに 常にと君が 思ほせりける (所念有計類) [萬葉二・206 挽歌]

\*この歌、塙書房『萬葉集』本文篇・訳文篇とも、この訓になっているが、塙書房『萬葉集索引』(古典索引刊行会編)には、記載されていない。

オモホシメス8例 (うち一音一字表記3例)

○：やすみしし 吾が大君の 神ながら 思ほしめして (於母保之売志弓) [萬葉十九・4266 大伴宿祢家持]

○：食す国は 栄えむものと 神ながら 思ほしめして (於毛保之売之弓) [萬葉十八・4094 大伴宿祢家持]

○遠くあれば 一日一夜も 思はずて あるらむものと

思ほしめすな (於毛保之売須奈)

○：吾が大君の 万代と 思ほしめして (所念食而) 作らしし 香具山の宮 [萬葉十五・3736 中臣家守]

○：やすみしし 吾が大君 高照らす 日の皇子 いかさまに 思ほしめせか (所念食可) [萬葉二・199 柿本朝臣人麻呂]

○：あをによし 奈良山を越え いかさまに 思ほしめせか (御念食可) 或いは云ふ、「思ほしめか」 あまざる 鄙にはあれど [萬葉二・162 持統天皇]

○：いかさまに 思ほしめせか (御念食可) つれもなき 真弓の岡に [萬葉一・29 柿本朝臣人麻呂]

○：いかさまに 思ほしめせか (御念食可) つれもなき 城上の宮に [萬葉二・167 柿本朝臣人麻呂]

萬葉集 御字例12例  
思ホス16例中4例：オモホシ (御念) 1例、オモホス (御念) 2例、オモホセ (思御) 1例

○わが大君 ものな思ほし (物莫御念) 皇神の 副へて賜へる 吾がなけなく [萬葉一・77 御名部皇女]

○秋山の 木の下隠り 行く水の 吾こそ益さめ 思ほすよりは (御念従者) [萬葉二・92 相聞 鏡王女]

○藤波の 花は盛りに なりにけり 奈良の都を 思ほ

すや君（御念八君）

〔萬葉三・330 相聞 防人司佑大伴四綱〕

○春山の 友うぐひすの 鳴き別れ 帰ります間も 思  
ほせ吾を（思御吾）〔萬葉十・1890 春の相聞〕

思ホシメス8例中3例：オモホシメセ（御念食） 3例

○：いかさまに 思ほしめせか（御念食可） 或いは云  
ふ、「思ほしけめか」 あまざかる 鄙にはあれど いは  
ばしる 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下

知らしめしけむ 天皇の 神の命の 大宮は ことこ  
聞けども：〔萬葉一・29 柿本朝臣人麻呂〕

○：吾が大君 皇子の尊の 天の下 知らしめしせば  
春花の 貴からむと 望月の たたはしけむと 天の  
下 一に云ふ、「食国」 四方の人の 大船の 思ひ頼み  
て 天の水 仰ぎて待つに いかさまに 思ほしめせ  
か（御念食可） つれもなき 真弓の岡に 宮柱 太  
敷きいまし みあらかを 高知りまして：

〔萬葉二・167 柿本朝臣人麻呂〕

○磯城島の 大和の国に いかさまに 思ほしめせか  
（御念食可） つれもなき 城上の宮に 大殿を 仕  
へ奉りて 殿隠り 隠りいませば：

〔十三・3326〕

食ス10例中1例：ラス（御食） 1例

○やすみしし 吾が大君の 食す国は（御食国者） 大  
和もこも 同じとそ思ふ

〔萬葉六・956 帥大伴卿〕

見サク1例中1例：メサク（御覽） 1例

○やすみしし 吾が大君の：あり通ひ 見さくも著し

（御覽母知師） 清き白浜

〔萬葉六・938 山部宿祢赤人〕

見シタマフ10例中1例：メシタマハ（御見多麻波牟曾） 1  
例

○ありつつも 見したまはむそ（御見多麻波牟曾） 大  
殿の このもとほりの 雪な踏みそね

召ス2例中1例：ヲシ（御食） 1例

○戯奴がため 吾が手もすまに 春の野に 抜ける茅花  
そ 召して肥えませ（御食而肥座）

〔萬葉八・1460 紀女郎〕

※一般に「めしてこえませ」と訓まれているもので  
あるが、「をしてこえませ」と訓む。

シラス12例中1例：シラサ（御知） 1例

○思はぬを 思ふと言はば 真鳥住む 雲梯の社の 神  
し知らさむ（神思將御知）〔萬葉十二・3100〕

（3） 土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』解説へ七 孤語の  
解釈についての当該部分（四〇九頁・四一一頁）を以下に  
掲げる。

活用または音韻の面から問題になる語もある。たとえば  
「大峰にし ナカサダメ（甲）ル 思ひ妻あはれ」（記89）が  
それで、前後の文意から推して、ナカは「仲」（原文は「那  
加」であるから、「汝が」と解することはできない）、サダメ  
ルは一応「定める」と解して意味は通るが、「定める」とい  
う動詞は存在せず、「定む」は下二段活用の他動詞であるか  
ら（自動詞は「定まる」で四段活用）、その活用形はすべて



「定メ(乙)」であつて、メ(甲)の語尾は存在しない。つまりサダメ(甲)ルは、「定」では説明できず、かといつてそれ以外の解釈もできない。われわれの知っている語彙や国語学の知識では、どうにもならない言葉なのである。こういう場合、道は三つしかない。その一は分らないとして棚上げすること。その二は原文に誤りがあるとして、解釈できるように改めること。その三は存在の可能性の多い孤語を仮定して解釈すること。その中で、原則的には第三の道を選ぶのがよいことは、いうまでもあるまい。問題は可能性の論証であつて、それによつて可能性が多いか少ないかが分かれてくる。

このような立場に立つならば、サダメ(甲)ルはそれほどむずかしい難問ではない。連語の末尾に「メ(甲)ル」という形をもつのは、いくらでも例があるからである。「佩ケ(甲)ル大刀」(記23)、「直に向かへ(甲)ル一つ松」(記29)、「桜花いまだ含メ(甲)リ」(万・四〇七七)など。これらは四段活用動詞の連用形(イ列音、甲)にアリが接続し、動詞の語尾はアと融合してエ列音・甲となり、リだけが残つたものである。このリが一般に完了の助動詞といわれているものに外ならない。だから同じ現象は連用形が甲類になる力行上一段、カ変の動詞にも現われるのであつて、「来(キ)アリ↓ケ(甲)リ」「着(キ)アリ↓ケ(甲)リ」となる。このことからサダメ(甲)ルを「定ミ(甲)アリ」の融合であろうと類推することが可能であつて、問題は四段活用の「定ム」の用例がないということだけになる(用例があれば、始めから問題になりはしない)。そこで次に、文献では下一段動詞である「定ム」が四段にも活用した可能性を論証する手続きが必要になつてくる。それはこの歌の「語釈」に書いたことである

から、ここでは繰返さないが、その可能性はきわめて大きいと思う。だから孤語の解釈は、用例をあげることができないという意味では仮説といわねばならないが、そのような仮説を、学問的に価値の低いものであるかのように考えるのは、誤つた用例主義・実証主義である。誤つた用例主義は、言葉は必ず二回以上文献の上に現われるものだといふ誤つた仮定の上に、自らは気づかずして立つていたのであつて、一回しか現われていない孤語でも、それとは無関係な既知の語を用例として解釈しようとするのである。

これとよく似た問題語が、もう一つある。仁徳天皇の歌「さわさわに 汝が言へこそ」(記63)のイヘセがそれで、セは敬語の助動詞スの活用形であるから「言ハセコソ」となるべきところで、これはどう説明すればよいか。これについては下のセに逆行同化されて、ハがへに変化したのであろうという説が出されて、私もあるほど思つたことがあるが、この同化説はあまり感心しない。なぜならば「為(ス)」「着(キル)」「見(ミル)」に助動詞のスが接する場合は、下にくる音声に関係なく、セ・ス・ケス・メスとエ列音になるからである。敬語のスは、前にのべた完了のりの場合と同様、動詞の連用形にアスが接して、連用形の語尾とアが融合し、スだけが残つたものであるとすれば、四段活用の場合も「言ヘス」という形があつてよいのではないか。すなわち、

si + asu → seasu      ki + asu → keasu  
ni + asu → neasu      iji + asu → ijeasu

となるわけである。その場合ケ・メは甲類になるように、へも甲類でなければならぬわけであるが、仁徳天皇の歌を見るとはたして甲類の文字「幣」が用いてある。



四段活用にスが接する場合は、ア列音になるのが普通であることは確かであるが、 $i + a$  の融合はア列音とエ列音（甲類）の二つの場合があつて、右の「言へス」は後者の例であり、ただその例が一つしかない孤語であるというにすぎないであろう。このことは、継続的存在の意を表わすアリ、いわゆる完了の助動詞リが動詞の連用形に接続する場合について見ると、いっそう明瞭で、ア列音になる場合とエ列音になる場合とがある。そしてどういうわけか、中央の歌ではエ列音（甲類）になる例が多く、東国の歌ではア列音になるものが多いのである。

- |             |   |                |   |
|-------------|---|----------------|---|
| $tai + ari$ | ↓ | $tatari$ (立たり) | ① |
|             | ↓ | $tateri$ (立つり) | ② |
| $moi + ari$ | ↓ | $motari$ (持たり) | ③ |
|             | ↓ | $moteri$ (持つり) | ④ |
| $ki + ari$  | ↓ | $kari$ (着り)    | ⑤ |
|             | ↓ | $keri$ (着り)    | ⑦ |
| $ifi + ari$ | ↓ | $iferi$ (言へり)  |   |
|             |   | (来り)           | ⑥ |
|             |   | (来り)           | ⑧ |
- ②④の用例はたくさんあるから、それ以外の用例を次にあげておく。
- ① 松の木の並みたる見れば家人の我を見送ると多<sub>理</sub>しも  
ころ (万・四三七五)
- ③ 我のみや子毛太留といへば陸奥の塙に立てる松も子持て  
り (承德本古謡集)
- ⑤ 笹が葉のさやぐ霜夜に七重加流<sub>着る</sub>  
が膚はも 衣にませる子ろ (万・四四三一)
- ⑥ 旅といへどま旅になりぬ家の妹が着せし衣に垢着きに迦  
理 (来り↓助動詞) (万・四三八八)

#### (4) 記紀

- ⑦ 我が旅は久しくあらしこの吾が家流<sub>着る</sub> 妹が衣の垢  
づく見れば (万・三六六七)
- ⑧ 去年の春いこじて植ゑし我が宿の若木の梅は花咲きに家  
里 (来り↓助動詞) (万・一四二二)
- ただし、アスが動詞に接続する場合、四段はア列音になるのが普通で、サ変・カ変・上一段の場合はエ列音になるのはなぜか、またアリが動詞に接続する場合は、中央語ではエ列音になる例が多く、東国語ではア列音になるのはなぜか、この点については国語学者の説明を聞きたいと思うが、それはともかくとして、事実は右のとおりである。とすれば、問題語の「言へせこそ」は、へを逆行同化と見るよりも、「 $i + a$ 」の融合と見るほうがよいのではないかと思うのである。
- 土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』解説七 孤語の解釈について (四〇九頁・四一一頁)
- …止さず飲<sub>せ</sub> (阿佐受衰勢) ささ [記三九歌謡]  
○…あさず飲<sub>せ</sub> (阿佐孺塙齊) ささ [紀三二歌謡]  
○…美味らに聞しもち飲<sub>せ</sub> (衰勢) … [記四八歌謡]  
○…うまらに聞し持ち食<sub>せ</sub> (塙勢) … [紀三九歌謡]  
○…蜻蛉はや囁<sub>ひ</sub> (俱譬) … [紀七五歌謡]
- このほか、字の順序が変えてあると考えられている難訓歌に  
○…雁雁の食らふ (邏賦俱能理歌理攝) …  
[「紀一二三歌謡」(大系『古代歌謡集』)による訓]  
がある。この歌の「邏賦俱」を「くらふ」と訓めば「食らふ」の例となる。
- また、顕宗天皇の室寿に、  
○…美(うまら)にを 飲喫(やら)ふるがね 美飲喫哉、

此には于魔羅備鳥 野羅甫屢何候と云ふ。 あが子等…

「ヤラフ」(1例) があり、

「ヤラフ」(1例) があり、

○岩の上に 小猿米焼く 米だにも 食げ(多礙) て通

らせ 山羊(かましし) の老翁(をち) 「紀一〇七歌謡」

「タグ」(1例) がある。

また、イザナミノミコトのヨモツヘグヒ (神代紀「泉之

竈 普母都俳遇比」、古事記上巻「黄泉戸喫」の「くひ」は

「クフ」であろう。「へ」は、

○臣は是苞直担が子なり」とまをす。苞直担、此には珥倍

毛菟と云ふ。

「神武天皇即位前紀戊午年八月 全集『日本書紀

①』二一〇頁」

の「にへ 贅」の「へ」である。

風土記に「タグ」が1例ある。

○あらさかの 神のみ酒を たげたげと (多々義々止)

言ひけばかもよ わが酔ひにけむ

「常陸国風土記(香島郡) 三九二頁」

萬葉集の「クフ」4例

○…青柳の 枝くひ持ちて (枝啄持而) うぐひす鳴く

も 「萬葉十・1821」

○…白鷺の 梓啄ひ持ちて (梓啄持而) …

「萬葉十六・3831」

○…上つ瀬に 鵜を八つ潜け 下つ瀬に 鵜を八つ潜け

上つ瀬の 鮎を食はしめ (年魚矣令昨) 下つ瀬の

鮎を食はしめ (鮎矣令昨) … 「萬葉十三・3330」

萬葉集の「タグ」2例。人1例、駒1例。

○妻もあらば 摘みて食げまし (採而多宜麻之) 沙弥

の山 野の上のうはぎ 過ぎにけらずや

「萬葉二・221 柿本朝臣人麻呂」

○左奈都良の 岡に粟蒔き かなしきが 駒は食ぐとも

(古麻波多具等毛) わはそともはじ

萬葉集の「ハム」15例。人8例、馬4例、鳥3例。

萬葉集の「ハム」15例。人8例、馬4例、鳥3例。

一音一字表記

○わが盛り いたくくたちぬ 雲に飛ぶ 葉食むとも

(久須利波武等母) またをちめやも

「萬葉五・847」

○雲に飛ぶ 葉食むよは (久須利波牟用波) 都見ば

いやしきあが身 またをちぬべし 「萬葉五・848」

○瓜食めば (宇利波米婆) 子ども思ほゆ 粟食めば

(久利波米婆) まして偲はゆ…

「萬葉五・802 山上憶良」

○柵越しに 麦食む子馬の (武芸波武古字馬能) はつ

はつに 相見し児らし あやにかなしも

或る本の歌に曰く、「馬柵越し 麦食む駒の (牟芸波武古麻

能) はつはつに 新肌触れし 児ろしかなしも」といふ。

「萬葉十四・3537 雑歌」

○春の野に 草食む駒の (久佐波牟古麻能) 口止まず

あを偲ふらむ 家の児ろはも

「萬葉十四・3532 雑歌」

「昨」

○馬柵越しに 麦食む駒の（麦昨駒乃） 罵らゆれど  
なほし恋しく 思ひかねつも

〔萬葉十二・3096 寄物陳思〕

「喫」

○吾が君に 戯奴は恋ふらし 賜りたる 茅花を食めど  
（茅花乎雖喫） いや瘦せに瘦す

〔萬葉八・1462 大伴宿祢家持〕

○飯食めど（飯喫騰） うまくもあらず 行き行けど  
安くもあらず あかねさす 君が心し 忘れかねつも

〔萬葉十六・3857〕

○香塗れる 塔にな寄りそ 川隈の 屎鮒食める（屎鮒  
喫有） いたき女奴

〔萬葉十六・3828〕

○うつたへに 鳥ははまねど（鳥者雖不喫） 縄延へて  
守らまく欲しき 梅の花かも

〔萬葉十・1858 春の雜歌〕

○婆羅門の 作れる小田を 食む鳥（喫鳥） 臉腫れて  
幡杵にをり

〔萬葉十六・3856〕

○吾が門の 榎の実もり食む（榎実毛利喫） 百千鳥  
千鳥は来れど 君そ来まさぬ

〔萬葉十六・3872〕

○うつせみの 命を惜しみ 波に濡れ 伊良廬の島の  
玉藻刈り食む（玉藻茹食）

〔萬葉一・24 麻統王〕

○次、登由宇氣神、此者、坐外宮之度相神者也。

〔全集『古事記』一一六頁〕

次に、登由宇氣神（とゆうけのかみ）、此は外宮の度相に

坐す神ぞ。〔全集『古事記』一一六頁・一一七頁〕

神宮の内宮には天照大御神が祀られており、外宮には豊受大神（登由宇氣神）が祀られている。ここにもウケが使われている。豊受大神（とようけのおおかみ）は食物を司る神である。

（6）「飢える」意の語は一般にウウ（飢）であるが、古事記一四歌謡と日本書紀一〇四歌謡とにウ（飢）の連用形エの用例がある。

○楯並めて 伊那佐の山の 木の間よも い行き目守ら  
ひ 戦へば われ早や飢ぬ（和礼波夜恵奴） 鳥つ鳥  
鶉飼が伴 今助けに来ぬ

〔記一四歌謡〕

○しなてる 片岡山に 飯に飢て（伊比爾恵弓） 臥せる  
その田人あはれ

親無しに 汝生りけめや さす竹の 君はや無き

飯に飢て（伊比爾恵弓） 臥せる その田人あはれ

〔紀一〇四歌謡〕

したがって、ウウ（飢）の後のほうのウに中心の意味があり、ワ行音の動詞である。前のほうのウは意義を明確にする語で、接頭辞的に付属したものと考えられる。こちらのウもワ行音のウであって、その意義は「食物」である。このウがラスのヲとなる。

（7）萬葉集にラス10例ある（うち一音一字表記2例）。

○：天皇の 食す国なれば（乎須久尔奈礼婆）：

〔萬葉十七・4006 大伴宿祢家持〕

○：大君の 命恐み 食す国の（乎須久尔能） 事取り  
持てて：

〔萬葉十七・4008 大伴宿祢家持〕

○やすみしし 吾が大君の 食す国は（御食国者） 大

和もここも 同じと思ふ

〔萬葉六・955 大宰少貳石川朝臣足人〕

○…遠き代に かかりしことを 朕が御代に 顕はして  
あれば 食す国は〔御食国波〕 栄えむものと 神な  
がら 思ほしめして…

〔萬葉十八・4094 大伴宿祢家持〕

○やすみしし 吾が大君 高照らす 日の皇子 あらた  
への 藤原が上に 食す国を〔食国乎〕 見たまは  
むと みあらかは 高知らさむと…

〔萬葉一・50 藤原宮の役民の作りし歌〕

○…吾が大君 皇子の尊の 天の下 知らしめしせば…  
天の下 一に云ふ、〔食国の〔食国〕 四方の人の 大船  
の 思ひ頼みて…

〔萬葉二・167 柿本朝臣人麻呂〕

○…やすみしし 吾が大君の…天の下 治めたまひ 食  
国を〔食国乎〕 定めたまふと…

〔萬葉二・199 柿本朝臣人麻呂〕

○…續麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食す  
国を〔食国乎〕 治めたまへば…

〔萬葉六・928 笠朝臣金村〕

○食す国の〔食国〕 遠の朝廷に 汝等が かく罷りな  
ば…

〔萬葉六・973 聖武天皇〕

○…吾が大君の 天の下 治めたまへば もののふの  
八十伴の男を 撫でたまひ 整へたまひ 食す国の  
〔食国之〕 四方の人をも あぶさはず 恵みたまへ  
ば…

〔萬葉十九・4254 大伴宿祢家持〕

キコシラスは6例ある（うち一音一字表記3例）。

○…この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み た

にぐくの さ渡る極み きこし食す〔企許斯遠周〕  
国のまほらぞ…

〔萬葉五・800 山上憶良〕

○高御座 天の日継と 皇祖の 神の命の きこし食す  
〔伎己之乎須〕 国のまほらに…

〔萬葉十八・4089 大伴宿祢家持〕

○…神ながら わご大君の…敷きませる 難波の宮は  
きこし食す〔伎己之乎須〕 四方の国より 奉る 御  
調の船は…

〔萬葉二十・4360 大伴宿祢家持〕

○やすみしし 吾が大君の きこし食す〔所聞食〕 天  
の下に 国はしも さはにあれども…

〔萬葉一・36 柿本朝臣人麻呂〕

○やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子の きこ  
し食す〔聞食〕 御食つ国 神風の 伊勢の国は…

〔萬葉十三・3234 雜歌〕

○…しらぬひ 筑紫の国は 賊守る おさへの城そと  
きこし食す〔聞食〕 四方の国には…

〔萬葉二十・4331 大伴宿祢家持〕

ヲシタマフ（うち一音一字表記例なし）…一般にメシタマ  
フと訓まれているもの。

○…吾が大君 皇子の命 万代に をしたまはまし〔食  
賜麻思〕 大日本 久邇の都は…

〔萬葉三・475 大伴宿祢家持〕

（8）メス6例（うち一音一字表記3例）

○延ふ葛の 絶えず偲はむ 大君の 見しし野辺には  
〔売之思野辺尔波〕 標結ふべしも

〔萬葉二十・4509 大伴宿祢家持〕

○古を 思ほすらしも わご大君 吉野の宮を あり通ひ見す  
〔安里我欲比売須〕

〔萬葉十八・4099 大伴宿祢家持〕

○大君の 繼ぎて 見すらし〔都芸弓売須良之〕 高円の 野辺見るごとに 音のみし泣かゆ

〔萬葉二十・4510 甘南備伊香真人〕

○愛しきかも 皇子の命の あり通ひ 見し活道の  
〔見之活道乃〕 道は荒れにけり

〔萬葉三・479 大伴宿祢家持〕

○：豊の宴 見す今日の日は〔見為今日者〕：

〔萬葉二十・4266 大伴宿祢家持〕

○：こちごちの 花の盛りに 見さずとも〔雖不見〕  
かにもかくにも 君がみ行きは 今にしあるべし

〔萬葉九・1749 春三月、諸卿大夫等の難波に下りし時の歌二首〕

メサク1例（うち一音一字表記例なし）

○やすみしし 吾が大君の：あり通ひ 見さくも著し  
〔御覽母知師〕 清き白浜

〔萬葉六・938 山部赤人〕

メシタマフ10例（うち一音一字表記2例、メシのみ一音一字表記1例）

○：見したまひ 〔売之多麻比〕 明らめたまひ：

〔萬葉二十・4360 大伴宿祢家持〕

○：この大宮に あり通ひ 見したまふらし〔売之多麻比良之〕：

〔萬葉十八・4098 大伴宿祢家持〕

○やすみしし 吾が大君 高照らす 日の皇子 あらた

への 藤原が上に 食す国を 見したまはむと〔売之賜牟登〕  
みあらかは 高知らさむと：

〔萬葉一・50 藤原宮の役民の作りし歌〕

○：埴安の 堤の上に あり立たし 見したまへば〔見之賜者〕：

〔萬葉一・52 藤原宮の御井の歌〕

○：旅行く君は：国状を 見したまひて〔見之賜而〕：  
〔萬葉六・971 四年壬申、藤原宇合卿、西海道  
の節度使に遣はされし時に、高橋連虫麻呂の作りし歌一首〕

○ありつつも 見したまはむそ〔御見多麻波牟曾〕 大  
殿の このもとほりの 雪な踏みそね

〔萬葉十九・4228 三形沙弥〕

○やすみしし 我が大君の 夕されば 見したまふらし  
〔召賜良之〕 明け来れば 問ひたまふらし〔問賜良之〕

神岳の 山の黄葉を 今日もかも 問ひたまはまし〔問給麻思〕  
明日もかも 見したまはまし〔召賜万旨〕 その山を：

〔萬葉二・159 天武天皇太后〕

○やすみしし 我が大君の 見したまふ〔見給〕 吉野  
の宮は：

〔萬葉六・1005 山部宿祢赤人〕

○：やすみしし 吾が大君 秋の花 しが色々に 見したまひ〔見賜〕  
明らめたまひ〔明米多麻比〕 酒みづき 栄ゆる今日の あやに貴さ

〔萬葉十九・4254 大伴家持〕

メシアキラム4例（うち一音一字表記1例）

○時の花 いやめづらしも かくしこそ 見し明らめ  
〔売之安伎良米晩〕 秋立つごとに

〔萬葉二十・4485 大伴宿祢家持〕

○天皇の 御代万代に かくしこそ 見し明らめめ〔見  
為安良伎良目米〕 立つ年のはに

〔萬葉十九・4267 大伴宿祢家持〕

○御心を 見し明らめし〔見為明米之〕 活道山：

〔萬葉三・478 大伴宿祢家持〕

○秋の花 種々にあれど 色ごとに 見し明らむる〔見  
之明牟流〕 今日の貴さ

〔萬葉十九・4255 大伴宿祢家持〕

キコシメス2例（うち一音一字表記1例）。

○桜花 今さかりなり 難波の海 おしてる宮に 聞こ  
しめすなへ〔伎許之売須奈倍〕

〔萬葉二十・4361 大伴宿祢家持〕

○やすみしし わが大君の きこしめす〔所聞見為〕  
背面の国の：

〔萬葉二・199 柿本朝臣人麻呂〕

メス9例（うち一音一字表記例なし）

○はしきやし 栄えし君の いましせば 昨日も今日も  
吾を召さましを〔吾乎召麻之乎〕

〔萬葉三・454 天平三年辛未の秋七月、大納

言大伴卿の薨ぜし時の歌六首 余明軍〕

○東の 多芸の御門に侍へど 昨日も今日も 召す言も  
なし〔召言毛無〕

〔萬葉二・184 皇子尊の宮の舍人等の働傷し  
て作りし歌二十三首〕

○葦蟹を 大君召すと〔王召跡〕 何せむに 吾を召  
すらめや〔吾乎召良米夜〕：歌人と わを召すらめや

〔和乎召良米夜〕 笛吹きと わを召すらめや〔和乎

召良米夜〕 琴弾きと わを召すらめや〔和乎召良米  
夜〕：

〔萬葉十六・3886 乞食者の詠二首〕

○朝には 召して使ひ〔召而使〕 夕には 召して使  
ひ〔召而使〕 使はしし 舍人の子らは 行く鳥の  
群れて侍ひ あり侍てど 召したまはねば：

〔萬葉十三・3326 挽歌〕

※次の二例はメスから外す。

○戯奴がため 吾が手もすまに 春の野に 抜ける茅花  
そ 召して肥えませ〔御食而肥座〕

〔萬葉八・1460 紀女郎の、大伴宿祢家持に  
贈りし歌二首〕

※これは「をしてこえませ」と訓む。

○石麻呂に 吾物申す 夏瘦せに 良しといふものそ  
鰻捕り食せ〔武奈伎取喫〕

〔萬葉十六・3853 瘦せたる人を嗤咲ひし歌  
二首〕

※これは「むなぎとりはめ」と訓む。

メシタマフ2例（うち一音一字表記例なし）

○やすみしし 吾が大君の：食す国を 定めたまふと  
鶏が鳴く 東の国の 御軍士を 召したまひて〔喚賜  
而〕：

〔萬葉二・199 柿本朝臣人麻呂〕

○朝には 召して使ひ 夕には 召して使ひ 使はし  
し 舍人の子らは 行く鳥の 群れて侍ひ あり侍  
ど 召したまはねば〔不召賜者〕：

〔萬葉十三・3326 挽歌〕

メシツドフ（下二段）1例（うち一音一字表記例なし）

○かけまくも あやに恐し 吾が大君 皇子の命 もの

のふの 八十伴の男を 召し集へ〔召集聚〕 あども

ひたまひ 朝狩に 鹿猪踏み起こし 夕狩に 鶉雉踏  
み立て： 〔萬葉三・478 大伴宿祢家持〕

メサグ〔下二段〕 1例（うち一音一字表記1例）

○あが主の み靈賜ひて 春さらば 奈良の都に 召上  
げたまはね〔咩佐宜多麻波祢〕

〔萬葉五・882 山上憶良〕

（10） シラスは「知る」の意のものが3例、「領有する」の意の  
ものが9例ある。

「知る」3例（うち一音一字表記例なし）

○思はぬを 思ふと言はば 天地の 神も知らさむ（神  
祇毛知寒） 邑礼左変

〔萬葉四・655 大伴宿祢駿河麻呂〕

○思はぬを 思ふと言はば 大野なる 三笠の社の 神  
し知らさむ（神思知三）

〔萬葉四・561 大伴宿祢百代〕

○思はぬを 思ふと言はば 真鳥住む 雲梯の社の 神  
し知らさむ（神思將御知）

〔萬葉十二・3100 寄物陳思〕

「領有する」9例（うち一音一字表記例なし）

○：万代に かくし知らさむ（如是ニミ知三） み吉野  
の 秋津の宮は： 〔萬葉六・907 笠朝臣金村〕

○高光る 我が日の皇子の 万代に 国知らさまし（国  
所知麻之） 島の宮はも

〔萬葉二・171 皇子尊の宮の舍人等の慟傷し  
て作りし歌二十三首〕

○：あをによし 奈良の都に 万代に 国知らさむと  
（国所知等） やすみしし 吾が大君の 神ながら  
思ほしめして： 〔萬葉十九・4266 大伴宿祢家持〕

○天にはも 五百つ綱延ふ 万代に 国知らさむと（国  
所知牟等） 五百つ綱延ふ 〔萬葉十九・4274 式部卿石川年足朝臣〕

○泣沢の 神社に神酒据ゑ 祈れども 我が大君は 高  
日知らしぬ（高日所知奴） 〔萬葉二・202 柿本朝臣人麻呂〕

○やすみしし 吾が大君の 高敷かす 大和の国は 皇  
祖の 神の御代より 敷きませる 国にしあれば 生  
れまさむ 御子の継ぎ継ぎ 天の下 知らしまさむと  
（所知座跡） 八百万 千年をかねて 定めけむ 奈良  
の都は： 〔萬葉六・1047 田辺福麻呂之歌集中出也〕

○今知らす（今所知） 久邇の都に 妹に逢はず 久し  
くなりぬ 行きてはや見な 〔萬葉四・768 大伴宿祢家持〕

○今造る 久邇の都は 山川の さやけき見れば うべ  
知らすらし（宇倍所知良之） 〔萬葉六・1037 大伴宿祢家持〕

○天地の 遠きがごとく 日月の 長きがごとく おし  
てる 難波の宮に わご大君 国知らすらし（国所知  
良之） 〔萬葉六・933 山部宿祢赤人〕

また、シラシ来ル2例、天シラス3例、高シラス7例  
シラシ来ル2例（うち一音一字表記1例）

○葦原の 瑞穂の国を 天降り 知らしめしける 皇祖  
の 神の命の 御代重ね 天の日継と 知らし来る  
(之良志久流) 君の御代御代：

〔萬葉十八・4094 大伴宿祢家持〕

○…千代重ね いや継ぎ継ぎに 知らし来る (所知来  
流) 天の日継と 神ながら わが大君の 天の下  
治めたまへば：

〔萬葉十九・4254 大伴宿祢家持〕

天シラス3例

○わが大君 天知らさむと (天所知牟登) 思はねば  
おほにそ見ける 和束仙山

〔萬葉三・476 大伴宿祢家持〕

○ひさかたの 天知らしぬる (天所知流) 君ゆゑに  
日月も知らず 恋ひわたるかも

〔萬葉二・200 柿本朝臣人麻呂〕

○…和束山 御興立たして ひさかたの 天知らしぬれ  
(天所知奴礼)：〔萬葉三・475 大伴宿祢家持〕  
高シラス7例 (うちシラスのみ一音一字表記1例)

○…この川の 絶ゆる事なく この山の いや高知らす  
(弥高思良珠) 水そそく 滝の都は 見れど飽かぬ  
かも

〔萬葉一・36 柿本朝臣人麻呂〕

○やすみしし わが大君の 高知らす (高知為) 吉野  
の宮は：〔萬葉六・923 山部宿祢赤人〕  
○…宮柱 太敷き奉り 高知らす (高知為) 布当の宮  
は：

〔萬葉六・1050 久邇の新京を讃めし歌二首〕

○やすみしし わが大君は 高照らす 日の皇子 あら

たへの 藤原が上に 食す国を 見したまはむと み  
あらかは 高知らさむと (高所知武等)：

〔萬葉一・50 藤原の役民の作りし歌〕

○吾が大君 神の命の 高知らす (高所知) 布当の宮  
は：

〔萬葉六・1053 久邇の新京を讃めし歌二首〕

○神代より 吉野の宮に あり通ひ 高知らせるは (高  
所知者) 山川を良み

〔萬葉六・1006 山部宿祢赤人〕

○やすみしし 吾が大君の 神ながら 高知らせる (高  
所知流) 印南野の 大海の原の あらたへの 藤井  
の浦に：〔萬葉六・938 山部宿祢赤人〕

(11) シラシメスは、萬葉集に12例ある (うち一音一字表記4  
例)。

○皇祖の 遠き御代にも おしてゐる 難波の国に 天の  
下 知らしめしきと (之良志売之伎等) 今のをに  
絶えず言ひつつ：

〔萬葉二十・4360 大伴宿祢家持〕

○高御座 天の日継と 天の下 知らしめしける (志良  
之売師家類) 皇祖の 神の命の：

〔萬葉十八・4098 大伴宿祢家持〕

○葦原の 瑞穂の国を 天降り 知らしめしける (之良  
志売之家流) 皇祖の 神の命の：

〔萬葉十八・4094 大伴宿祢家持〕

○…天の下 知らしめしける (之良志売之祢流) 皇祖  
の 天の日継と 継ぎて来る 君の御代御代：

〔萬葉二十・4465 大伴宿祢家持〕



○吾が大君 神の命の 高知らす 布当の宮は…八千年  
に 生れつかしつ 天の下 知らしめさむと（所知  
食跡） 百代にも 変はるましじき 大宮所

〔萬葉六・1053〕

○…糧原の ひじりの御代ゆ 生れましし 神のことごと  
と つがの木の いやつぎつぎに 天の下 知らしめ  
ししを（所知食之乎） 或いは云ふ、「めしける（食米）」

…いはばしる 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天  
の下 知らしめしけむ（所知食兼） 天皇の 神の命  
の…

〔萬葉一・29 柿本朝臣人麻呂〕

○明日香の 清御原の宮に 天の下 知らしめしし（所  
知食之） やすみしし 吾が大君 高照らす 日の皇  
子…

〔萬葉二・162 持統天皇か〕

○…天照らす 日女の命 天をば 知らしめすと（所知  
食登） 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極  
み 知らしめす（所知行） 神の命と…

…吾が大君 皇子の尊の 天の下 知らしめしせば  
（所知食世者）…

〔萬葉二・167 柿本朝臣人麻呂〕